

## 関東大震災から100年 生と死が交錯する水辺に栄えた繁華街

江戸時代に運河が張り巡らされていた“水都大阪”。淀川水系の川筋に発展した町と文化を深掘りするには、ヴェネチアや蘇州など世界の水都との比較以上に、まずは身近な江戸（東京）を探ることで見えてくるものがある。

大河ドラマ「どうする家康」が放送中で関心のある方も多いと思うが、徳川家康が駿河から移った時、江戸城周辺の丘や谷に武家屋敷が集められ、町人の町は現在の銀座や日本橋付近、さらに隅田川を越えて墨田区や江東区の方に広がった。そこも運河が巡らされた地域である。

隅田川の流域は大阪と関係が深い。佃煮で知られる佃島は、佃村（現・大阪市西淀川区佃）の名主、森孫右衛門が移住した土地であるし、深川（現・江東区）は、摂津国から家康が招いた深川八郎右衛門に由来する。家康の旧領には大きな河口がなかったため、古代からの港があり、治水に実績のある摂津から人を呼んで開発を託したのである。

また、江戸を代表する盛り場であった深川（現・江東区）について『江戸深川情緒の研究』（深川区史編纂会、1925年）も、「水の中の陸か、陸の中の水か。其いづれが適当な表現であるか分からないやうな深川は、我邦ならば大阪に較べられよう」と比較対象に大阪の名をあげている。

私が大阪と比較する上で興味を抱く地域が、国技館がある両国駅（墨田区）の周辺である。鼠小僧次郎吉の墓がある回向院を中心に、江戸時代から相撲も含めて様々な見世物興行でにぎわった。散策すると「忠臣蔵」でおなじみの吉良上野介の屋敷跡や勝海舟生誕の地の碑、芥川龍之介の母校両国小学校に文学碑もある。葛飾北斎も付近で生まれ、墨田区の、すみだ北斎美術館も開設されている。

大阪と比較して、河川の近くに庶民の娯楽が集まった両国界隈の様子は、運河沿いに芝居小屋や映画館が集まった道頓堀や、難波新地、千日前などミナミに似ていないだろうか。

そして、回向院は明暦



きょうも賑わう千日前

の大火（明暦3年・1657年）の死者（3万人とも10万人ともされる）を弔うために開かれている。

両国駅の北側には、関東大震災と空襲による死者を慰霊するため、震災で38,000人もの死者を出した被服廠（軍服を製造した工場）跡地に東京都慰霊堂と復興記念館も建てられた。千日前も、大坂の陣での死者の供養に読経が千日つづいたとされることから始まり、江戸時代には刑場と墓地があった。死の無常と生きる喜びが紙一重で共存し、盛り場として繁栄したことは両国と似ている。

一方、両国から隅田川を渡った西岸には、約37,000坪の敷地に、天領から集めた米を貯蔵する幕府の御米蔵があった。蔵の西側には米問屋や札差が集まり、町名も蔵前（台東区）である。米を運ぶため水運の良い立地を要求するのは、東西とも同じである。大阪では、米市場のあった堂島や蔵屋敷の集まった中之島のイメージかもしれない。深川本所あたりは材木商が多く木場があり、道頓堀川や西長堀川の流れる堀江（大阪市西区）に材木商があったのも似ている。

今年、大正12（1923）年9月1日に起きた関東大震災より100年目の年である。隅田川の橋を頑丈なものに架け替えて東京の震災復興は進められたが、大阪市も関東大震災の教訓から市内の橋を堅牢なものに架け替えていった。現在の淀屋橋、大江橋など中之島界隈の橋がそれである。同時に新しい橋梁のデザインはモダンで、近代都市が要求する理念である「都市美」を生み出すことになった。

ということで、東西で架け替えられた橋を今回の表紙に並べてみた。東京と大阪、二つの都市の橋くらべである。



両国にある東京都慰霊堂。震災の慰霊のため昭和5（1930）年に建てられた。設計は伊東忠太

### 筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―」（創元社）など。